

真昼のお化け

小川未明

青空文庫

上

光一こういちは、かぶとむしを捕とろうと思おもつて、長ながいさおを持もつて、神じん
 社んしゃの境内けいだいにある、かしわの木きの下したへいつてみました。けれど、
 もうだれか捕とつてしまったのか、それとも、どこへか飛とんでいっ
 ていないのか、ただ大おおきなすずめばかりだけが二、三びき前ぜん後ごを警け
 戒いかいしながら、幹みきから流ながれ出でる汗あせへ止とまろうとしていました。し
 かたなく、鳥居とりいのところまでもどつてきて、ぼんやりとして立たつ
 ていると、せみの声こえがうるさいほど、雨あめの降ふるようように頭あたまの上うえから
 きこえてくるのでした。そのとき、勇ゆうちやんが、あちらから駆かけ

てきました。

「なにをしているのだい？」

「なんにもしていない。」

光一は、さびしく思っていたところで、お友だちをばうれしそ
うに迎えたのです。

勇吉は、並んで鳥居によりかかるとすぐに、問題を出して、
「長い足で歩いて、平たい足で泳いで、体を曲げて後ずさりする
もの、なあんだ……。」と、光一向かってきました。

「考えもの？」

「ううん、光ちゃんの知っているものだよ。」と、勇吉は笑
いました。

「なんだろうな。」

光一は、しきりに考かんがえていました。

かぶとむしではないし……。

「ああ、わかった。ぼつただろう？」と、大おおきな声こえで答こたえました。

勇吉ゆうきちは、ちよつと目めを光ひからして、頭あたまをかしげたが、

「ちがうよ、ぼつたは、泳およぎはしないよ。」と、朗ほがらかに、笑わらつ

たのです。

「僕ぼく、わからないから教おしえて。」

とうとう、光一こういちは、降参こうさんしました。

「えびさ。きよう僕ぼく、学がっ校こうで理料りかの時間じかんにならつたんだよ。光こう

ちゃんもえびはよく知しっているだろう。けれど、そう聞きくと不ふ思し

議ぎと思おもわない？ 僕ぼく、えびをおもしろいと思おもつたんだ。かぶとむしなんかより、えびのほうがずっとおもしろいと思おもつたんだよ。あした、川かわへびんども持もつて行って、小ちいさなえびを捕とつてきて、びんの中なかへ入いれてながめるのだ。」と、勇ゆう吉きちは、おもしろいことを発はっ見けんしたように、いいました。

学が校っこうでは、一ねん年ごう上えの勇ゆう吉きちのいうことが、なんとなく光こう一いちにまことらしく聞きこえて、珍めづらしいものらに感かんじられました。自じ分ぶんも来らいねん年ねんになれば、やはり理り科かで同おなじところを習ならうのだろう、そうしたら、かぶとむしよりもえびがおもしろくなり、えびよりはもつとおもしろいものがあることに気きづくかもしれないと思おもいました。すると、急きゆうにこの大おおきな自し然ぜんが、貴とうい、美うつく、輝かがく御ご殿てんのごと

く目の中に映つたのです。

「光ちゃん、僕、えびをとつてきたら、どんなびんの中へ入れる
 と思う？ 僕すてきなことを発明したんだよ。君わからないだ
 ろう。」と、勇吉は、いいました。まったく、そんなことが、
 光一にわかろうはずがありませんでした。

むしろ、いろいろなことを知っている勇吉をうらやましそう
 に、光一は、だまって見つめていたのです。

「君、水族館で、お魚がガラスの箱の中を、泳ぐのを見たらう
 ？ 水草を分けて、ひらりひらりと尾を揺るがしたり、また、
 すうい、すういと小さなあわを口から出して。僕、あんなのを造
 るんだよ。」

「勇ちゃん、どうして、造るの？」

「入れ物かい？ 教えてあげようか、僕の家へおいでよ。」

勇吉が、先になつて、光一は、後からついて、人通りの少ない、白く乾いた真昼の往來を駆けていきました。

「僕も、兄さんからきいたので、まだ実験してみないのだから、うまくできるか、どうかわからないのだ。ここに、待つておいで

。」
勇吉は、家へ入つて、アルコールと、ひもと、マッチを持つてきました。

「お母さんが、昼寝をなさつていて、見つからなくてよかつた。」
彼は、見つければしかられるということをはのめかしたのでし

た。それから、物置の戸を開けて、中から、空の一升びんを取り出し^だました。また、バケツに水^{みず}をいっぱい入れて、そばに備^{そな}えておきました。

「どうするの？」と、光一^{こういち}は、ききました。

「このガラスのびんをうまく切るのさ。そうすれば、いい入れ物^{もの}ができるだろう……。」と、勇吉^{ゆうきち}は、大^{おお}きなびんをながめて、その中^{なか}へ水草^{みずくさ}を入れ、赤^{あか}べんたんや、えびを泳^{およ}がせるおもしろみを、いまから目^めを細^{ほそ}くして、空^{くう}想^{そう}せず^くにいられませんでした。

「うまく、二つに切^きれる？」と、光一^{こういち}が、疑^{うたが}っている間に、勇^{ゆう}吉^{きち}

吉^ちは、ひもをアルコールに浸^{ひた}して、びんの胴^{どう}へ巻^まきました。そして、マッチをすって、それへ火^ひをつけると、見^みえるか見^みえぬ幽^{かす}

かな青^{あお}白^{しろ}い炎^{ほのお}が、ひもの上^{うへ}から燃^もえはじめました。いいかげんの時^じ分^{ぶん}に、急^{きゆう}にバケツの水^{みず}へびんをつけると、ピン！ と音^{おと}がして、ひもを巻^まいたところから、びんは、真^まつ二^{ふた}つにきれいに分^わかれたのです。

「おお。」といつて、光^{こう}一^{いち}は、もちろん、それをやった勇^{ゆう}吉^{きち}までもが、思^{おも}わず感^{かん}歎^{たん}して、声^{こゑ}を放^{はな}つたのであります。光^{こう}一^{いち}は自分^{じぶん}を忘^{わす}れて、持^もっているさおを地^じ面^{めん}へ倒^{たお}したのであります。

中

「きよう、勇^{ゆう}ちゃん^{ちゃん}はびんどを持^もつて川^{かわ}へえびを取^とりにいくとい

つたが、僕もいっしよにゆこうかな。けれど、だいぶ空が暗くな
つて、雨が降りそうだ。」

光一は、学校の帰りに考えながら、原っぱを歩いてきました。
空を見ていた目を地面へ移すと、なんだろう？ 黒光りのする、
とげとげしたものが、ゆく先の草の上に落ちていたのでした。

「虫かしらん？」

光一は、すぐに、それが生きもののように感じました。なんだ
か気味の悪いものです。しかし動きません。用心深く、目をこ
らして近づくと、長い足があつて、二つの目が光っています。か
ぶとむしではない、むかでもない、えびのようであるが……ま
だ見たことのない虫としか思われませんでした。

「なんだろうな？」と、彼は、もつと近づいてよく見ると、長いひげがあつて、それはまちがいなく、えびでありました。

「えびだ、大きなえびだ！」

不思議でたまりません。こんな草の上に落ちていなのに、いま水の中から、はね出したばかりのように、黒色の甲らがぬれて
いるなどでありませぬ。彼は、ちよつと、それを拾い上げるのにた
めらいました。が、えびであることがわかると、しぜんに勇気が
出て、手に取り上げたのです。

なるほど、勇ちゃんのいったように、長い足と平たい足とがあ
つて、どこも傷がついていませんでした。

水の中へ入れたら、生き返るかもしれぬと、光一は思つたので、

なるべく強く握つよらないようにして、急いそいだのでありました。

「どうして、こんなところに、えびがあつたんだらうな。」

考えかんがれば、考えかんがるほど、不思議ふしぎでなりませんでした。それから、

このえびをどうしたらいいかということにも迷まよつたのでした。家うちへ帰かえつて、すぐ水みずに入れてみよう、そして、生いきたら飼かつておこ
う、もし生いき返かえらなかつたら、そうだ、標ひょう本ほんにしようか？

だが、もつと気きにかかるのは、悪わるい病びょう気きのはやる時じ分ぶんに、こ
んなものを拾ひろつて帰かえると、きつとお父とうさんもお母かあさんも、やかま
しくいつて、しかることでした。だから、家うちの人ひとたちの目めにつか
ないとところに置おかなければならない。

光こう一いちは、頭あたまに、いろんなことを考かんがえながら、原はらつぱの真まん中なかに、

立ち止まって、えびを鼻先へぶらさげて匂いをかいでみました。まだ、海を泳いでいた時分の、磯の香が残っていました。

「きつと、生き返るかもしれない。」

彼は、かばんから、半紙を出して、えびを包みました。そして、急ぎました。家へ着くと、洗面器に塩水を造って、入れてみたのです。けれど、やはり、えびは動きませんでした。彼は、ともかく、この、えびを勇ちゃんに見せようと思つて、また紙に包んで、生け垣の間へ隠しました。

「茶だなの上に、おやつがありますよ。」と、お母さんが、おつしやいました。光一は、おやつも食べないで、外へ飛び出したのであります。

「勇ちゃんが見たら、びつくりするだろうな。」と、歩きながら、ときどき、えびを紙から出してながめていました。

指先でつまんで、これが、水の中みず なかにいる時分の姿じぶんすがたを想像そうぞうして、空くうちゆう中ちゆうを泳およがしてみました。

お宮みやの前まえまでくると、ワン、ワンとけたたましい犬いぬのほえ声ごえがしました。

境けいだい内ないをのぞくと、昨日きのう、かぶとむしをさがした、かしわの木きの下したで、ペスが、しきりに地面じめんを掘ほるように、つめで、かいて、騒さわいでいるのでした。

「ペスや、なにしているんだい？」

光一は、さつそく、犬のそばへいつてみました。へびでも見つけたのかと思つたのが、そうでなく小さな穴に向かつてほえていたのでした。

「なあんだ。」といつてみると、黒いものが穴の中から頭を出したようです。

「おや、なにか見えたぞ。」

光一は、棒切れをきがして、穴をつついてみました。奥の方に、小さなしかの角の形をしたものが、ちよつと見えています。

「やあ、かぶとの子だ。こんなところに、かぶとむしの穴があるとは思わなかつたなあ。ペス、おまえはおりこうだね。」と、光一は、喜んでペスの頭をなでてやりました。そして、えびをあち

らの木の根のところへ置いてきて、いっしょうけんめいに、その
 穴の中からかぶとむしを掘り出すのに、夢中になっていました。
 やつと一ぴき捕まえると、まだいるだろうと、光一は、顔を赤
 くして、顔に汗を流しながら、穴を掘り返していました。また、
 あちらで、「ワン、ワン。」と、ペスが、ほえました。顔を上げ
 ると、驚いたのです。ペスは、えびをくわえて、二、三度頭を振
 ったが、そのまま、あちらへ駆け出していきました。
 「ペス！ それは、大事なんだよ。」といつて、光一は、後を追
 いかけたけれど、だめでした。もう、姿は見えなくなつてしま
 いました。

学校の運動場で、遊んでいるとき、勇吉がそばへきま

したから、

「勇ちゃん、川へ魚を捕りにいったの。」と、光一は、ききました。

「雷が鳴り出したろう、雨が降るといけなからいかなかつた。それで、晩に縁日へ行って、金めだかを買ってきたのさ。」

「あのびんに入れた？」

「入れたよ、こんど川へ行って、藻を取ってくるのだ。」

光一は、えびを拾った話をしました。

「えっ、あの原っぱでかい。」と、勇吉は、さも信じられないというような、顔つきをしたのです。

「うそでない、草の上に落ちていたんだよ。」

光一は、それ以上、ほんとうだと信じさせるようにいえないことを、至極残念に思いました。

「魚屋さんかしらん。しかし、あんな原っぱを通るはずがないだろう。また、ねこがさらってきたなら、食べてしまおうし。そのえびは、どつか、傷がついていたかい。」と、勇吉が、ききましました。

「一本も足がとれていなかった。まだ生きているように、黒光りがしていた。」

「そして、足が、動いていた？」

「じつとしていた。僕、家へ帰つて、すぐに塩水に入れてみたけれど、死んでいたよ。」と、光一は、いいました。

「そいつは、おかしいね。それで、そのえびどうしたの。」と、
勇吉は、そんなこと、あり得ないことだといわぬばかりに、問
いました。

「僕、勇ちゃんに、見せようと思つて、持つていったのだよ。途
中で、かぶとむしを見つけたので、つかまえていると、ペスが
くわえて、逃げてしまつたんだ。」と、光一は、考えても残念
そうに、答えました。

「なあんだ——。」と、勇吉は、両手を頭の上のせて、し
ばらく考えていたが、

「ああ、光ちゃん、わかつた。君は、夢を見たんだ！ きつと、
光ちゃんは、夢を見て、それをほんとうにあつたことと思つてい

るんだ。第一、海にいるえびが、原っぱへくるわけがないさ。それでなければ、お化けだ！」

勇吉は、太陽がきらきらする、森の方を見上げて、笑いました。白い雲が、帆のように、青い空を走っていきました。

「えつ、お化け？　なんでお化けであるもんか……。」と、光一は、力んで、いいはつたが、自分ながら、昨日のことを考えると、まったく夢のような気がしてならなかったのです。

下

日曜の午前でした。空は、曇っていました。どうしたことが、

このごろは、晴れたり、降ったりして、おかしな天気がつづくの
でした。光一は、友だちが遊んでいないかと思つて、赤土の原
つぱへくると、あちらに黒く人が集まつて、なにか見えています。
ちようどえびが落ちていたあたりでした。

「なにを見ているのだろうか。」と、彼は、走つていきました。

そこには、自転車を止めた職人ふうの男もいれば、小僧さ
んもいました。また小さな女の子もいました。けれど、自分の知
つた顔は、一人もなかったのです。光一は、なんだかさびしい気
がしたが、みんなの中へ入つてみると、おじいさんが草の上へ店
を開いていました。一つのバケツには、かにや、かめの子が入つ
ていました。のぞくと、むずむずと重なり合つたり、ぶつぶつと

あわを吹ふいています。他たの一つのバケツには、それこそ奇き妙みょうなものが入はいっていました。真まつ黒くろい色いろをして、かぶとむしくらいで、頭あたまがおお大きく、尾おみじかの短さかない、魚いかにに似にて魚さかなでないものでした。この奇き妙みょうなものうは、バケツの中なかで、たがいに押おしくらまんじゅうをして、バケツのまわりに頭あたまをつけています。

「おじいさん、こんな大おおきなおたまがあるものかね？」と、職しよく人にんふうの男おとこがきいていました。

「こいつのすんでいる池いけは、そうたくさんはありません。これは遠えん方ほうから送おくられてきたんですよ。夜よるになると鳴なきます。」

「どういって？」

「ボーオ、ボーオといって、鳴なきます。」と、おじいさんが答こたえ

ました。

「鳴くつて、ボーオ、ボーオと、こいつがかい？」

今度は、鳥打帽をかぶった小僧さんが、きいて、たまげてい

ました。

「まるで、自動車の笛みたいだな。」と、職人ふうの男は、

笑いました。

「なに、薬品でも飲まして、おたまを大きくしたんだらう。」

と、小僧さんが、おじいさんのいったことを真に受けなかったよ

うです。

小さな女の子は、大人たちの間から、おかつぱ頭を出して、バ

ケツを見ながら、

「これ、なまずの子でないこと。」といっていました。

「いくら、なまずの頭あたまが大きいおおつて、こんな大きいおおのはない。や

はり、これはおたまだ。おたまにちがいねえが、おじいさん、食しよくよう

用よう ができるは鳴なくというが、これは、その子こでないのかね。」
と、職しよく人にんふうの男おとこは、いったのでした。

おじいさんは、きせるに煙草たばこをつめて、マッチで火ひをつけて吸すいながら、それには、答こたえないで、

「なにしろ珍めづらしいもんでさあ。坊ぼっちゃんたちは、かにや、かめの子こには、飽あきましてね。」と、おじいさんはいったのです。

光一こういちは、早はやくお家うちへ帰かえつて、お母かあさんにお金かねをもらつてこようと思おもいました。

「このおたまだけ、どうしても買わなければならぬものだ。」
と、心こころの中で、叫さけびました。おじいさんは、一ぴき五銭せんで売うるの
だけれど、きようは特別とくべつに三銭せんに負まけておくといいました。彼かれ
は、このあいだお父とうさんから、お小使こづかいをもらったのを大事だいじにし
ておけばよかったと後悔こうかいしたのです。バツチンをしたり、花火はなび
を買かったりして、みんな使つかってしまったのでした。どういって、
お母かあさんに、ねだつたらいいだろうかと考かんえながら、飛とんで帰かえ
りました。お母かあさんの顔かおを見ると、
「ねえ、お母かあさん、鳴なくおたまつてありますか？」
いきなり光こう一いちは、質しつもん問もんを発はつしました。ふいに、こんな質しつもん問もん
をされたので、お母かあさんは、

「さあ、鳴くおたまじやくしなんて、まだ、きいたことがありませんね。」と、つい話につりこまれて、なんでこんなことをいったのか知らずに、おっしゃいました。

「それが、お母さんあるんですよ。日が暮れると、ボーオ、ボーオって、鳴くというのです。」

光一は、自分も驚いたといわぬばかりに、目をまるくして、お母さんの顔を見ました。

「なんか、きつとほかのものでしよう、かじかではないんですか。」

「色が真っ黒で、頭が大きくて、尾がちよっぴりついているんです。それは、かわいいのですよ。」光一は、いいました。

「まあ、気味の悪いこと、おたまじやくしのお化けみたいなのね。」と、お母さんは、かわいいどころか、ぞつとするように、おつしやいました。

「一ぴき三銭に負けておくつて、ねえ、買ってよ。」

光一は、お母さんが珍しいといつてくださらなかつたので、おいに当てがはずれたのです。

「どこへ、そんなものを売りにきたんですか、家へ持ってこられると困りますね。」

「ちつともこわくなんかないんだよ。ただ、鳴くおたまなんだもの。」

彼は、無理にも、お母さんに承知していただいて、お金をも

らわなければなりませんでした。それで、家の内いえうちをお母さんかあの後あとについて歩きあるました。そして、やっと三びき買かうほどのお金かねをい
ただいたとき、彼は、どんなにうれしかったかしのれない。だが、
運うんが悪わるく雨あめが降ふり出だしてきました。

「困こまったなあ、おじいさんは、どつかへいつてしまうだろうな。」
と、光一こういちは、気きをもんでいたのであります。

「この雨あめの中なかを、いつまで原はらっぱにいられるものですか。」と、
お母さんかあは、おかしそうにおつしやいましたが、あまり光一こういちが落ら
胆くたんするので、後あとでかわいそうになつて、

「じきに、この雨あめは上あがりますよ。」と、やさしく、いたわるよ
うに、いわれました。しかし、お昼ひるのご飯はんを食たべてしまつても、

まだ雨はやみそうもありませんでした。もうおじいさんは、とつ
くに、どこへかいつてしまったものとあきらめなければならな
ったのです。

晩方ばんがたになって、やっと雨あめが晴はれて、空そらが明あかるくなりました。
ちようど、その時じぶん分ぶんでした。

「おたまがきた！」と叫さけんで、どこかの子こが、家いえの前まえを走はしつてゆ
きました。光こう一いちは、はつとして、耳みみを澄すましました。

「あの、おじいさんがきたのだ！」

彼かれは、すぐすぐに家うちから飛とび出だしました。そして、子こ供どもの走はしつてい
つた方ほう角かくを見みましたが、なんらそれらしい人ひと影かげもありません。
あちらの煙えん突とつのいただきに、青あお空ぞらが出でて、その下したのぬれて光ひか

る道みちを人々ひとびとが、いきいきとした顔かおつきをして往ゆくのでした。

「おたまは、どこへきたんだろうな。」と、光こう一はしばらく往おうら来いに立たつていました。そこへ、お湯ゆから上あがって、顔かおへ白粉おしろいを真まつ白しろにつけたかね子こさんが、長ながいたもとの着物きものをひらひらさして、横道よこみちから、出でてきました。

「光こう一さん、晩ばんにチンドン屋やの行ぎょうれつがあつてよ。」と、知しらせました。

「どこに?」

「青物市場あおもものいちばの前まえに、もうじきはじまるわ。」

かね子こさんは、それを見みにくらしいのです。光こう一は、市場いちばの方ほうを見みると、チン、チン、ジャン、ジャン、という音おとがきこえて

くるような気がしました。おたまのことは、忘れられないけれど、
 つい、自分もかね子さんといつしよにチンドン屋の行列を見
 る気になって、道のくぼみの水たまりを避けながら、二人は、町
 の方へ向かって歩いたのでした。

くる！ くる！ くる！ いろんなようすをしたチンドン屋が
 ……旗を立て、黒い山高帽をかぶってくるもの、兵隊帽子に
 ゴム長をはいてくるもの、赤い頭巾をかぶって、行燈をしよつ
 てくるもの、燕尾服を着て、鉦と太鼓をたたいてくるもの……。

先のが、かぶとむし、つぎは、さいかち、そのつぎは、えび、
 そのつぎが、ボーオ、ボーオと鳴くおたま、……光一の目には、
 みんな虫になって見えたのであります。

もう、りようがわ両側の店には、あかり燈火がついて、おおぞら大空は、むらさきすい紫水

しよう晶のように暗くらくなっていました。

こう光一は、かね子こさんに、ひるまみ昼間見たおたまの話はなしをすると、

「そんな、おたまなんかないわ。」と、かね子こさんは、すげなくいいました。

「あの、おじいさんから、おたまをか買っていたらなあ。」と、こう光一は、ざんねん残念でなりません。

「かね子こさんさえ信しんじないのだから、きょうのことを勇ゆうちやんに話はなしたら、勇ゆうちやんも、きつと、そんなおたまはないというだろう。そして、こう光ちゃんは、またみゆめような夢を見たといつて笑わらうだろう……。」

そうかんがえると、光一は、頼りなく、さびしかったのでした。そして、この世の中には、自分にだけ信じられて、他の人には、どうしてもわからない、不思議なことがあるものだということを、彼は、しみじみと感じたのでありました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 一」講談社

1977（昭和52）年9月10日

1983（昭和58）年1月19日第5刷

底本の親本：「未明童話 お話の木」竹村書房

1938（昭和13）年4月

初出：「お話の木」

1937（昭和12）年8月

※表題は底本では、「真昼《まひる》のお化《ば》け」となっています。

※初出時の表題は「真昼のお化」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年6月20日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

真昼のお化け

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>